2022年7月24日（日）主日朝礼拝説教

『なぜ、疑ったのか』井上隆晶牧師
ローマ7章1～4節、マタイ14章24～33節

❶【私たちは二面性を持ちながら信仰するのである】

洗礼を受けてキリスト教信者になっても、私たちは別人のように変わるわけではありません。洗礼は魔法ではないのです。長年、体と心に染みついた古い習慣、考え方、行動パターンなどがあるのです。しかし日曜日ごとに教会に集まるという新しい生活習慣、聖書を読み、祈るという生活がその古いもの上に加わるのです。だから私たちには、古いものと新しいものが共存しているのです。イエス様が「**天の国のことを学んだ学者は皆、自分の倉から新しいものと古いものを取り出す一家の主人に似ている。**」（マタイ 13:52）と言われたのはそういうことです。私たちは自分という倉の中に新しいもの（天の朽ちないもの）と古いもの（地上の朽ちるもの）を同時に持っているのです。
パウロもそのことをよく知っていて次のように語っています。「**私は…善をなそうという意志はありますが、それを実行できないからです。私は自分の望む善は行わず、望まない悪を行っている。**」（ローマ 7：18～19）彼は洗礼を受けても、自分は悪いことを行ってしまい、善を行うことができないみじめな人間だ（7：24）と嘆いています。彼のような神秘体験をし、病人を癒したり、神の国のことを大胆に語れる人でさえも、自分は悪に支配されていて苦しいと言っているのです。だから私たちが、自分の罪に嘆くのはもっともです。ではどう考えたらいいのでしょうか？私たちの信仰が足りないから罪を犯すのでしょうか？私も信仰の初歩にはそう考えました。ではパウロの信仰が足りない、とでもいうのでしょうか？そうではありません。矛盾したまま私たちは救われているのです。パウロも「**感謝します**」と言っています。

❷【誰の支配下にいるのかを考えよう】

パウロは7章で結婚の比喩を用いて救いを語っています。ある女の人が夫と結婚しており、夫が生きている時に、他の人と一緒になれば姦通の罪を犯すことになりますが、夫が死ねば、他の人と一緒になっても罪にはなりません。それと同じように私たちはキリストの体に結ばれて、キリストと一体（夫婦）になったのです。キリストが私たちの夫になったのであり、キリストが私たちを支配しているのです。では誰と離婚したのかというと律法です。「**律法に対しては死んだ者となっています**」（ローマ7：4）「**律法から解放されています。その結果、文字に従う古い生き方ではなく**」（同7：6）と書いています。私たちは確かに罪を犯します。しかし律法、戒めの文字は私を裁けず、どうすることもできないのです。私はキリストのものだからです。キリストの支配とは何でしょう。愛の支配です。私の

中に恐れがあってもキリストは私を愛します。赦しの支配です。私の中に罪があっても裁きません。命の支配です。私の中に死があってもキリストの命が私を覆い、死を飲み込みます。善の支配です。私の中に悪があっても、キリストがそれに触れると善に代わってしまうのです。つまり万事が益となるのです。誰に支配されているかが大事になるのです。この世を見ると、罪、死、悪、病が支配しているように思うかもしれませんが、実はキリストが支配しています。だからそれらを恐れてはいけません。私が罪をやめられなくても、一生戦い続ければいいのです。負けて倒れ、傷ついてもいいのです。勝利とか救いはそれとは一切関係ないからです。**あなたはもう救われています。あなたは自分で勝つのではないからです。キリストの勝利があなたに及んでいるからです。**だから悪と戦いなさい。矛盾を抱えたままでいいのです。自分を見るより、そんな自分を愛して下さるキリストを見るのです。

❸【キリストから目を反らさない】

さて夜明け頃、イエス様は湖の上を歩いて弟子たちの舟に近づいていきました。湖は死の象徴です。死は底なしであり、すべての者を飲み込むからです。湖の上を歩くキリストは、死を支配する方であることを教えており、キリストの復活とキリスト教徒の生き方を象徴しています。弟子たちは最初、イエス様の事を幽霊だと思いましたが、イエス様が「**安心しなさい。私だ。恐れることはない。**」というと安心したようです。ペトロが「**あなたでしたら、私に命令して、水の上を歩いてそちらに行かせてください**」と言うと、主が「**来なさい**」と言われたので、彼は舟から降りて水の上を歩き、イエス様の方に進みました。ところが強い風に気がついて怖くなり、彼は水の中に沈み始めました。そこで「**主よ、助けて下さい**」と叫ぶと、イエス様はすぐに手を伸ばして彼を捕まえ「**信仰の薄い者よ、なぜ疑ったのか**」（マタイ 14：31）と言われます。そして二人が舟に乗り込むと、風は静まりました。ペトロは最初、キリストを真っ直ぐに見つめて歩いている時は、波の上を歩くことが出来たのに、周りの風の音を聞き始め、自分自身を見た時に、死の波の中に沈んでいきました。つまり、周りの人のうわさ話、社会の評価を気にし始め、自分の小ささ、弱さを見た時、悪魔の罠にはまり、不信仰の世界に沈んで行ったのです。

●私は仕事柄、いろんな人たちと面接をしなければなりません。先日、ある会社の上司が「部下を信じられない」というので、私はその人に言いました。「私は自分の教会の信者さんたちを信じています。私を応援してくれる、自分の味方だと信じています。私たちは疑おうとする自分の心を騙さなければいけません。疑うと悪魔が入ります。私はいつも自分でそうしています。」

イエス様がペトロに言われた「**信仰の薄い者よ、なぜ疑ったのか**」という言葉の「薄い信仰」とは、イエス様の言葉も信じ、周りの言葉も信じ、いろいろな言葉

が入ってきて、心の中でイエス様の言葉が薄くなってしまう状態のことです。熱心かどうかは問題ではないのです。方向性の問題です。イエス様を信じたら一途に、頑固に、迷わない心が大事なのです。私たちはすぐに迷います。自分が罪を犯し、失敗をすると、「神は私を赦してくれないかもしれない、私を愛してくれないかもしれない、神の霊は私を去るかもしれない」と神を疑い始めます。これが「薄い信仰」です。それが悪魔の声であることに気がつきません。悪魔はキリストの思いを疑わせようとするのです。神の言葉には素直に騙されることです。「神は私を愛しておられる」と何度も自分に言い聞かせ、自分を騙すのです。それは神だけではありません。夫婦も、親子も、上司と部下も、牧師と信徒も同じです。疑うのではなく、信じるのです。「**なぜ疑ったのか**」というイエス様の叱責を聞かねばなりません。

●アメリカの神学者ピールという人は「主にある気楽さ」という言葉を使っています。ただの気楽さではありません。主にあって気楽に生きるという事です。世の中何とかなるぞ、神様は何とかして下さるぞ、というキリストを信頼しきる気楽さの事です。

信仰とは単純になることです。最後はキリストのなさったことと、そのお言葉だけがもっとも確かだと思えてくるのです。祭司である私は、今日、皆さんに宣言します。自分の家族が信者でないからと恐れてはいけません。あなたが家族のために祈れば、彼らの罪は解かれます。主は「あなたが祝福する者を私も祝福する」と言われ、「あなたが地上で誰かの罪を解けば、天でも解かれる」と約束して下さったからです。信仰を持つことは選びです。選ばれてない人に腹を立ててはなりません。あなたの祈りによって家族が天に引き上げられることを疑ってはなりません。この世とその支配者を恐れてはいけません。彼らは私たちを酷使しますが、何もできません。合わせてやりなさい。この世の物を奪われても、決して奪えない命をあなたは持っているのです。死を恐れてはいけません。キリストの体となったあなたを死は支配できないからです。あなたは誰に愛され、誰の体であり、誰の支配下にいるかを思い出しなさい。悪魔はキリストのものに手を出せません。自分の未来を恐れてはいけません。天国の前払い金としてすでにあなたは聖霊を受けています。聖霊はその証印であって、あなたには「キリストのもの」という刻印が押されているのです。やがてあなたは残りのもの、神の国、完全な体、永遠の命を必ずいただくことになります。人の評価を恐れてはなりません。周りの人があなたを批判しても、キリストの愛は変わりません。神と神の約束を信じ、希望をもってこの世を軽やかに生きましょう。